美術に於ける植物文樣」が大部を占めてゐる。彼の時代にはまだクレタ文明が發見されてゐないので、ミケーネ文明とクレタ文明とを混同して、自由なる植物文にギリシア精神の自由の產物を見んとするが如き（一八三頁以下）また埃及の影響を稍々過重してゐるやうな缺點はあるが、アッティカ式以後についてはその優れた直觀と探究とは今日も充分に輝いてゐるのである。彼によれば古代東方、殊に埃及に見られる植物文樣がそこより西亞に移り、ミケーネ式にロータス樣式などを經て、古アッチカ初期樣式に生成し、材料としては埃及のロードスからやがてギリシアの特產たる唐草、更にその獨創たるアカントス文樣を生むに至る。そして更にこのギリシア式植物文はヘレニズム、ローマを經、ビザンツ美術、初期サラセン美術に迄美事に辿られてゐる。以上の推移は單なる叙述ではなく發展史である。

譯書である限りは譯文如何が問題であるが、青樓と同じく譯文もたたけば如何程でも埃が出るものであるが、數年に亙つて琢磨推敲されし蹟は歴然たるものありて、行文易々として稱して佳譯と言ひ得ると思ふ。殊に術語においては多少の議論あるものありとしても譯者の苦心の程が察せられる。ともあれ、表面的な方法論的批判が唯一の讀書であるとは思はざる、敬虔なる學徒はこの書より、また多大の方法論の方面においても教へられやう。（四八〇頁、定價七圓八拾錢、座右寶刊行會發行）（村田數之亮）

彙報

史學研究會例會

六月十三日（土）午後一時半、文學部史學科第一教室に於て開催

蒙古逸史考　本學部講師　石濱純太郎氏

民謠紹介　文學士　平山敏治郎氏

石濱氏講演。蒙古逸史はもとの南京維新政府の外交部長であつた陳籙氏が嘗て庫倫在任中、蒙文原本から譯させて自ら筆錄したもので、蒙古の先世から始まつて清の道光九年に終る蒙古史である。而して蒙古逸史のもとゝなつた蒙古文本は「エルデニ・イン・エリヘ（寶の珠數）」であらうといふことはかつて藝文十卷七號に發表したところである。その後、陳氏の「止園筆記」二册を獲たが「奉使庫倫日記」卷二の條に、逸史翻譯の事を記したと思はれる條あり、それにはその蒙文原本の題を「保樓」としてゐて、寶の珠數（エルデニ・イン・エリヘ）」とあはない。或はエリヘをエルヘ（威樓）とあやまり、寶樓と譯し、それを陳氏が「保寶樓」、略して「保樓」と保の意を補つたものであらう。

平山氏の紹介せし民謠錄音盤左の如し。

（〇印　町田嘉章氏採集）

田之神踊歌　飛騨益田郡下呂町森　八幡神社神事

御田植歌　○武藏秩父郡秩父町　秩父神社御田植祭
田樂囃子　丹波天田郡金山村上之條　御勝八幡神社神事
枕(無年踊)　○陸奥八戸市
田植踊　○陸中紫波郡乙部村
代掻唄　○伊豫喜多郡大洲町(馬鍬唄)
○安芸安佐郡龜山村
苗取節　丹後竹野郡木津村
田植唄　丹後竹野郡木津村
飛彈益田郡下呂町森
飛彈大野郡大八賀村(岩瀧地方)
○備後比婆郡比和町
草取唄　山城愛宕郡八瀨村
○丹後南桑田郡龜岡町
丹後竹野郡木津村
水車ふみ唄　○備後沼隈郡水呑町
永かへ唄　○丹後竹野郡島津村

讀史會

例會、五月二十二日(金)、午後六時より樂友會館一號室に於て開催、西田教授、以下約四十名出席、左記の研究發表があつて九時半散會した。

一、傳教の顯戒論　三回生　眞坂忠之氏
一、神社の保に就いて　清水三男氏

例會、七月三日(金)、午後六時半より樂友會館一號室に開く折から空襲警報發令され、嚴重な燈火管制下に西田教授以下約三十五名出席して左記の研究發表を聞き九時半閉會した。

一、法隆寺の講堂と食堂　二回生　直木孝次郎氏
一、普賢寺址に就て　毛利久氏
一、談話(近世の廟建築に就いて)　石田一良氏

京都帝國大學文學部史學科國史專攻學生　**丹波・丹後地方見學旅行報告**

讀史會の春季見學旅行は、例年の如く新學期の開始と共に其準備が進められてゐたが、大東亞戰爭の進行に伴ひ時局の緊迫は彌其度を加へ、爲に一旦中止されるに至つた。併し斯かる時局において專門研究への精進の必要が一層強く感ぜられ、吾々の見學旅行への熱心な要請もこゝに叶へられることになつた。吾々はかゝる緊迫の情勢下に行はれる見學旅行を眞に意義あらしむべく決意を固め丹波・丹後地方見學の途に就いた。西田先生、藤先生以下先輩學生すべて二十五名の一行であつた。

第一日(六月十九日)

講義終了後、京都發午後四時三十分及び六時三十分の二班に分れて城崎に向ふ。途中豊岡にて下川先輩が一行に參加される。城崎では横田先輩に迎へられ三木屋旅館に入る。

第二日(六月二十日)大乘寺・溫泉寺・本願寺・智恩寺

午前七時五十一分城崎を發し車窓より日本海を望見しつゝ八時

二十五分香住着、大乘寺に向ふ。約二十分にして山門に至る。建物は安永年間密藏上人が修築し天明年間密英上人が完成し今日に至つてゐる。本寺が應擧寺として世に著聞するのはこの密英上人の恩義に報ゐた應擧の作を多く有するからである。客殿にて小憩後、應擧及び其門弟の筆になる襖・屏風・軸等を見せて頂く。今その主なるものを擧げると、

一、十六羅漢圖　應擧筆、紙本著色、六曲屏風一雙
一、柳下狗子圖　應擧筆、紙本淡彩、一幅
一、鯉魚瀧登圖　應擧筆、絹本淡彩、双幅
一、龍虎玉燕之圖　應擧筆、紙本著色、三幅
一、鐘馗圖　應擧筆、紙本水墨、一幅
一、池中鯉魚海泳圖　應瑞筆、紙本著色、八枚
一、孝梅下狗子圖　守禮筆、紙本著色、十一枚
一、四季耕作圖　吳春筆、紙本著色、十二枚
一、山水圖　（國寶）應擧筆、紙本墨書、四枚

最右端の一隅に「天明丁未春冬平安源應擧」の落款がある。

一、孔雀圖　襖、（國寶）應擧筆、紙本墨書、十六枚

「寛政乙卯初夏富平安源應擧」とある。

一、郭子儀圖　襖、（國寶）應擧筆、紙本著色、八枚

等である。すべてを通じて自然は細密な筆致でそのまゝ寫し出され應擧派の特色をよく示すものであるが、最後のものは芭蕉の傍に六人の童子が戯れそれを郭子儀が眺めてゐる所を濃彩を以て鮮麗に描きその感覺の鮮新さいさゝかも失はれてゐない。誠に應擧の他の一面を示す作品である。又此等の繪から清純な氣高さを感ずるのは、應擧その人の名利をよそにした厚い報恩の誠の發露に基くからでもあらう。此處を辭し香住を發つて再び城崎に歸り溫泉寺に向ふ。境内にて昼食を濟し傍の石段を昇つて案内を乞ふ。客殿にて、

一、溫泉寺縁起、一卷

城崎溫泉の發見者と傳へられる道智上人のこと、天平十年聖武天皇より末代山溫泉寺の號を賜し事等を記す。

一、「末代山」の三字（寶鏡寺宮理門尼公御筆）　一軸
一、四所明神縁起　一幅

「海北友竹畫」なる落款あり。

等を拜見、本堂に入る。五間五面の單層入母屋造で蟇股も夫々内部意匠を異にし秀れてゐる。内部は格天井の純然たる密教式で鎌倉初期の樣式を保つてゐる。本尊十一面觀音立像（國寶）は祕佛で拜觀を許されないが千手觀音像は藤原時代の精妙な作である。十六善神像一幅も國寶にして圖樣は普通のものと異つた珍しいものである。恐らく鎌倉中期を下るまいと思はれる。溫泉寺を辭して城崎を發し、左窓に玄武洞を眺めて久美濱に着き直に本願寺に向ふ。門を入つて目につく本堂は五間五面の單層入母屋の和唐折衷樣式であるが更に優美な殿造の風を備へ頗る輕快味を漂はせた見事なものである。古文書類は時間の都合で全てを見盡すことは出來なかつたが、

一、本願寺掟書　一通

文明十六年甲辰七月五日春高（花押）とあり。

一、天正十四年十月日松井康之書狀　一通

千體佛讓受に關するもの。

一、千體佛分與記錄　數通

慶長八年七月、同六年三月、天正十三年三月七日等の日附あり。

一、朝鮮攻之節肥州名古屋より來書　一通

等が目についた。急いで久美濱にもどり天橋立に向ふ。見事な砂丘と松林を縫つて橋立に着く。天下の絶景を背景にした智恩寺に至り、

一、傳傳教大師筆心經、傳弘法大師筆心經　各一卷

一、九世智恩寺幹緣疏並序　一卷

文明十八年丙午月日幹緣比丘壽桃敬白とあり。

一、寛文九酉歲三月三日付繪馬　一面

酒屋の情況を示し宮津住五郎七以下の連署名あり。

等を見、文殊堂に文殊菩薩、脇侍善財童子、優闍王像（國寶）を拜觀する。極彩色の盛上文樣をもつ鎌倉時代の秀作である。境内の多寶塔は上下兩層繁簡を異にしつゝ纖細な感覺を織込んでゐる。智恩寺の見學を終へ一同打揃つて橋立の風光を賞しつゝ荒木別莊に入つた。こゝで八木・松山兩先輩の訪問を受け、夕食後は松山先輩の戰線に於ける體驗談に深い感銘を受けつゝ西田先生を中心に愉快な座談が續いた。（梅溪弁記）

第二日。夜が明けると宮津灣の美くしい景色が展開せられる。早朝の海は風だ。その灣内を漕ぎ出でゆく漁夫の姿にも浦島太郎傳說を語り合ふこと少時、この美しい宮津に別れて鹿原の金剛院へ向ふ。宮津で松山・八木兩先輩、舞鶴で三品先生が參加される。金剛院は眞如法親王の草創と傳へられるものである。その詳細は既に西田先生により、京都府史蹟勝地調査會報告第二册に報告せられてゐる所であり、蛇足を加ふる事になるが、所藏文書は中世近世にわたる物である。目についたものを擧げれば、鹿原山金剛院慈恩寺緣起一卷は高岳親王の御事、白河天皇と美福門院御二方の御尊崇の事を書き、德川時代の寫で金文は前記報告書に出てゐる。その他細川藤孝、忠沖（興）連署禁制（寫）、應永十一年八月の棟札等がある。

國寶三重塔は一見して室町時代のものと判るもので目下修理中であつた。本堂で阿彌陀如來坐像、增長天立像、多聞天立像、金剛力士立像二軀、執金剛神立像、深沙大將立像等を拜觀、いづれも國寶、又眞如法親王坐像に銘があつたが判讀し難いものである。金剛院を辭して舞鶴へ戻り、地方史家の出迎を受けて圓隆寺へ。圓隆寺は寺傳、長德年間の創建、主なる寶物は大般若經斷簡、（前缺）

卷末に

以正藏院本一校了

建仁三年三月四日堯慶一校了

とあり鎌倉期のものとみてよい。又鎌倉末か足利の初期とみられる阿彌陀來迎圖、虛空藏菩薩圖各一幅拜觀、更に本堂で本尊阿彌

陀如來坐像、藥師如來坐像、釋迦如來坐像、不動明王立像、毘沙門天立像拜觀、不動明王立像が一番秀作で貞觀末かと思はれ豐肥した體がみられる。毘沙門天立像には「佛師法眼幸祐永仁第六戊戌□月元三日圓隆寺」の墨書銘があり他は大體藤原時代のものと感ぜられる。本尊にも胎內銘がある。

圓隆寺から北行一町にして桂林寺へ。こゝは當地方有數の寺院であり。江戸時代には有栖川宮家の御新禱所であつた由。本堂に上つて所藏文書を拜見。建武元年二月九日の足利尊氏寄進狀、細川忠興書狀高槻高知書狀等あり。以つて由緒の古いことも併せ知られる。猶長享二戊申十月二十三日の銘ある鐘もあつた。

猶圓隆寺桂林寺ともに京都府史蹟調査報告に報告されてゐる。

舞鶴で松山・八木兩先輩とお別れして梅迫の安國寺へ向ふ。安國寺はもと光福寺と稱する一小刹であつたが曆應年間足利直義が國分寺に倣つて全國に安國寺を設けた際當國のそれにあてられた寺である。足利尊氏の生母上杉氏は光福寺と特に關係深く、それだけ尊氏の崇敬が篤かつたことは衆知の事實であつて境內には尊氏生湯井と稱するものがある。安國寺文書は國史研究室に既に影寫本があるが、上杉家關係尊氏關係の古文書が多數所藏せられ、興味深く拜觀することが出來た。

又本堂に安置されてゐる所謂子安地藏なるものは、尊氏の母が祈つて尊氏を生んだと云ふ傳說を持つものであり、藤原的な匂が比較的濃いものであるが鎌倉迄下ぐべきである由を敎へられた。

更に附近の醫王寺を見學する。小さい假堂に安置せられた上品上生の阿彌陀像は特に秀作とは云ひ得ないが元亨の胎內銘がありこの點から注目すべき作品である。

梅迫驛で三品先生、横田先輩とお別れして一路歸途につく。

總括して、今回見學旅行をした地方は昔の丹波國で、古くから書紀にみられ中央文化と交渉深く、都が平安京に移されて以後は殊に密接な關係を持ち、畿外でありながら畿內の取扱ひを受けてゐるが、この事は實地に史料を探訪して更にその感を深くした卽ち丹波の文化は中央の文化に準ずべきものの多いのは寧ろ驚嘆せしめられたところである。終りに本旅行に際して、貴重なる國寶什寶類の拜觀を快く許可された諸寺、及び旅行中一ならぬ御配慮に願つた諸先輩に對し深謝する。（野田好太郎記）

東洋史談話會

第二回例會　昭和十七年五月二十二日（金曜日）夜六時半より樂友會館に於て開會。左の研究發表あり。

陶淵明の精神　　村上嘉實氏

第三回例會　昭和十七年六月二十日（土曜日）午後三時より樂友會館に於て左の旅行談を聽く。出席者那波教授以下二十名、旅行談の內容は追て東洋史研究に發表の豫定。

浙東旅行談　　佐伯富氏

第四回例會　昭和十七年六月二十六日（金曜日）午後七時より樂友會館にて開催。宮崎助教授の左の講演あり。出席者、田村助教授以下二十名。追て其の詳細は東洋史研究に發表の豫定なり。

南洋を東西に分つ根據に就いて　　宮崎助教授

西洋史讀書會例會

例會　本年度第一回例會は六月十六日午後六時より樂友會館第一號室で開催。出席者、原教授、井上、中山、前川の諸講師以下十七名。

一、自由思想と權力思想
——Mercantilist に於ける——　　上之親夫氏

地理學談話會

例會　六月六日(土)、午後二時より實習室に於て開催。出席者二十二名。

一、長白山踏査談　　淺井得一氏
一、ハワイ　　村上次男氏
一、朝鮮水産視察報告　　吉田敬市氏

考古學教室土佐方面調査旅行

考古學教室では梅原教授指導の下に昭和拾七年七月二日より三泊四日に亙り四國土佐地方に調査旅行を行つた。一行は教授以下高橋囑託、藤岡副手、學生四名の計七名であつた。即ち七月二日早朝京都を發つて宇野高松經由にて土佐山田驛下車、夕刻香美郡佐古村逆川の龍河洞保勝會事務所に到着。こゝに先着の梅原教授並に縣より出張の龍河洞の發見者山内浩教諭と會同、小憩の後旅館に引上ぐ。

三日は朝先づ山内教諭の案内で天下の名勝龍河洞を見學し、遺跡地の下見分を終へて下山。保勝會事務所樓上に於いて保勝會保管陳列中の遺物殊に洞窟内發見の彌生式土器の實測並に寫眞撮影にかゝつた。三日の午後及び四日の午前午後に亙り洞窟内遺跡の實査を行ふ。遺跡の存する處は龍河洞内一千米の巡覽コースの最終部分、即ち出口に近い三箇所で、やゝ廣い空洞部で、出口に近い室より夫々第一第二第三室と稱してゐるが、第二室には燒石、木炭を出した遺址があり、又今保勝會事務所に陳列中の土器の並置せられてゐた痕迹の今尚明瞭に殘つた部分があり、第三室には所謂神壺とて稍頸の長い壺形土器が附近を流れた水の中の石灰の沈澱により埋まつてゐるのは珍しい。僅か二晝夜のスピード調査ではあつたけれども教授の指導と保勝會並に縣當局殊に山内教諭の熱心なる援助により、暗黑と濕潤の悪條件と戰ひつゝ、かなりの成果を收めることが出來た。尙土器には二種類あり事務所に陳列されてゐるものは比較的新しいやうである、又先頃喧傳せられた狩獵圖の壁畫云々は之が後世のものであることが確められた。土佐には佐川町東南の鳥の巢山にその名の起原を有する所謂鳥の巢石灰岩が秩父系に接して斷續的に走り、石灰岩の同種遺跡が存することが注目せられる。昨年調査せられ佐川狼で有名な佐川町城臺石灰洞遺跡もその一である。今回も一寸時を裂いて佐古村岩屋のそれを實見し石器斷片及び貝殼土師器等を採取した。

四日梅原教授は更に國分寺址・比江廢寺址方面を視察、素晴しい古瓦類を凡て手拓實測せられ夕刻一同高知市に到着した。

五日は朝旅館に於いて川田信敏氏將來の石劍二種の撮影及び山本氏將來の土器の文様手拓の後或は故山に歸臥せられてゐる小島祐馬博士を尋ね或は高知域桂濱等の史蹟名勝を探り或は佐川町に青山文庫を訪れて幕末維新の志士、名士の遺墨に接する等夫々幾多の收獲を收めて午後四時高知發の夜行列車にて歸學した。(及川幸夫)

京都帝國大學創立記念展覽會

昭和十七年六月十八日(木曜日)創立第四十五回記念日を迎へて文學部陳列館に於て地理學・考古學の各教室を一般に開放する外國史・東洋史に在ては左記の如き展覽を行つた。

國史の部

第一部　宸翰

國史研究室所藏文書及び目下研究室へ寄託中の觀修寺伯爵家所藏文書中より十五點を選んで陳列したのであるが、忍頂寺の事に關する後深草天皇宸翰御消息、源氏物語乙女の卷に關する後陽成天皇宸翰御消息は、從來知られてゐる如く特にその見事な御筆跡によつて光彩を放つてゐる。

第二部　元寇擊攘史料

正傳寺宏覺禪師蒙古降伏祈願開白文、及び壬生官務家文庫記錄中、元寇に關する小槻顯衡の日記を陳列し又、

第三部は武將の遺德を忍ふ爲楠木正儀證判和田助氏軍忠狀以下織田信長、豐臣秀吉、武田勝頼、毛利輝元等の戰國諸雄に關する史料を出陳した。

第四部は時局に關する南方發展關係資料を展覽し、江戸時代の日本とバタビヤ貿易に關する和蘭文書及び、先年西田教授が南方諸島に於て採習された土俗品を陳列した。

東洋史の部

當日「東洋人の西方發展に關する歴史資料」と題する東洋史研究室の陳列中主なるものを擧ぐれば次の如し、

第一部　匈奴民族

匈奴民族の遺物たる垂飾類・銅鏃・帶鈎の寫眞模形以下、古書に見へたるアッチラ王肖像等數點を列す。

第二部　突厥民族

闕特勤紀功碑拓本を中心として、歐人の之に關する研究著書を博く網羅し參觀に供す。

第三部　蒙古民族

東洋史研究室所藏の成吉思汗聖旨牌・成吉思汗碑拓本、宮崎助教授所有に係るアレッポ博物館所藏の西征蒙古人將來觀音菩薩像模型以下、十三―十六世紀に亘りペルシア・トルコ・インド・ロシア等に於て作成せられた古寫本の繪畫・插畫類の圖錄・寫眞等を陳列した。

會報

◇會員動靜

◇入會

京都市左京區吉田中大路三一近衞莊内　宇佐美武人氏
同　近衞通京大寄宿舍　野崎文彦氏
同　淨土寺南田町八　谷喜次郎方　中村二柄氏
同　北白川追分町一四五　中河スエ方　森田伊佐夫氏
東京市中野區鷺ノ宮一ノ一二七　石井方　吉川夏苗氏
岡山縣赤磐郡豊田村河田原　石田寛氏

（以上六氏　外山軍治紹介）

◇寄贈交換圖書

考古學雜誌　三二ノ五、六、七　日本考古學會
國史と國文學　一　國史國文學會
國民精神文化　八ノ五、七　國民精神文化研究所
國學院雜誌　四八ノ五、六、七　國學院大學雜誌部
國學院大學新聞　皇典研究所
史苑　一四ノ三　立教大學史學研究室
史學會　二〇ノ四　三田史學會
史學雜誌　五三ノ六、七、八　史學會
史迹と美術　一三ノ六、七、八　史迹・美術同攷會
人類學雜誌　七ノ六、七、八　日本人類學會
斯道文庫報　九　斯道文庫
社會學徒　一六ノ六、七、八　社會學徒社
社會經濟史學　一二ノ二、三、四、五　社會經濟史學會
中央文化研究會々報　二九、三〇　中央文化研究會
帝國學士院紀事　一ノ一、二　帝國學士院
哲學研究　二七ノ六、八　京都哲學會
同願　三ノ三四合刊　七、八、九合刊　北京佛教同願會
東洋史研究　七ノ二、三合刊　東洋史研究會
東方學報　東京一三ノ一　東方文化學院
日本文化史論　河出書房　松本彦次郎氏
文化　九ノ五、六、七　東北帝大文學會
無閑之古　六四　むかしの會
蒙　九ノ五、六ノ七、八　善隣協會
陽明文庫圖錄、第四輯目記　陽明文庫
歷史學研究　一二ノ五、六、七、八　歷史學研究會
歷史地理　七九ノ五、六、八〇ノ一、二　日本歷史地理學會
立命館論叢　六（歷史地理篇2）　立命館出版部
龍谷史壇　二九　龍谷史壇社